

専門医のリモート参加と 遠隔診療、多職種カンファレンスを組み合わせた 発達障害に対する地域連携医療モデル

松井 友紀子 ● まついこころのクリニック



本活動のモデル図

要旨

2024年5月から12月にかけて、「加西市基幹相談支援センターやすらぎ」が介入中の、発達障害と診断またはその可能性があるにもかかわらず専門的支援が十分に届いていない10～20代の3名を対象とし、専門医療機関「まついこころのクリニック」が連携した支援を実施した。具体的には、①やすらぎによる従前から継続する対面型支援、②精神科医によるリモート面接、③専門医であるクリニック院長を交えた関係者Web会議の3本柱で構成される介入を行った。対象者・支援者双方から高い満足度が得られた一方で、「支援者に対する支援」の重要性や、地域支援機関間の連携課題が明らかとなり、今後の継続的な取り組みの必要性が示唆された。

地域医療貢献のポイント

- ・専門医不在地域の若年の発達障害当事者に対し、質の高い医療や包括的ケアを提供する。
- ・支援者のケア力向上と同時に、不安軽減を図る「支援者に対する支援」。
- ・当事者本人も含めた地域支援機関同士の連携を推進・円滑化する。

1. 目的と方法

精神科医療の対応困難症例の中には発達障害を背景に持つ若年患者が一定数含まれており、適切な介入が将来的な予後に大きく影響する。こうしたケースでは、医療・福祉・行政が連携した多職種での支援体制が求められるが、現実には特に地方において発達障害や思春期・青年期特性に精通した専門職が不足しており、地域支援者の負担は大きい。

本活動では、兵庫県の「加西市基幹相談支援センターやすらぎ（以下、やすらぎ）」と、遠隔の同県西宮市に所在し、同市の発達障害診療ネットワークの一翼を担う「まついこころのクリニック（以下、当院）」が連携し、地域患者への専門性の高いケアの提供及び「支援者に対する支援」を目的に、図1の内容に基づき活動を実施した。

2. 現状の成果・考察

活動終了後、図1に示す②、③の項目について、対象者3名にアンケート、「やすらぎ」スタッフのうち4名にアンケートとインタ



「やすらぎ」ロゴマーク



「やすらぎ」は、障がいの種別・程度を問わず、一人ひとりに寄り添った相談支援を行っている



合同Web会議の様子

ビューによる調査を実施した(①は従前からの活動であるため評価対象から除外)。

その結果、図2～4の通り、全般的に本活動に対する評価は好意的であり、本活動の医療的支援の補完としての意義が一定以上確認

された。特に「支援者に対する支援」について明確な手応えと需要が確認された一方で、対象者の精神症状や生活の質(QOL)改善への直接的効果については、介入期間の短さや症状の変動幅の大きさから、明確な評価には至らなかった。また、本活動に関わる医師がかかりつけ医とは異なるため、“会議結果がかかりつけ医に共有されるまで時間を要し、医療機関での治療に迅速に反映されない”、“会議で提案された支援策がかかりつけ医の判断により実施されない”、“リモート医らが地域の支援者会議に参加できないため、協議内容が現場に十分に反映されない”といった事態に直面した。これらの点は、本活動モデルの限界と考えられる。

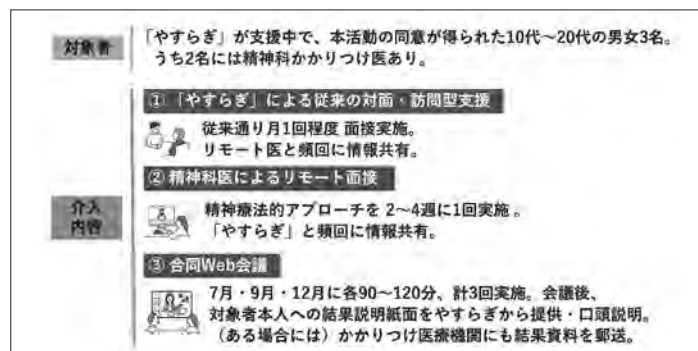
さらに本活動を通して、

- かかりつけ医が存在していても、支援者への医学的評価の共有が不十分な場合がある。
- 機関連携における支援方針や役割分担が曖昧な場合がある。



対象者本人向け結果説明紙面。本人に合わせた文体・デザインで作成

図1 2024年5～12月の取り組みの概要



等の課題が浮き彫りとなった。地域支援における多機関連携の困難さが、患者支援における本質的な問題として再確認されたのである。患者本人への直接的支援はもちろん、「支援者に対する支援」継続と機関連携の強化こそが、結果として患者の福祉の向上に資するという重要な示唆を与える結果となった。

3. 今後の展望

本活動を契機として、複数の地域支援機関が参画する症例検討会の開催を予定しているほか、当院と「やすらぎ」とのさらなる連携深化を視野に入れている。所属や立場の異なる支援者同士が、対等かつ双方向的に意見を交換し、共通理解に基づいた支援体制を構築できることが、今後の理想像と考える。

図4 本活動で感じられた「支援者に対する支援」の要素について、支援者(やすらぎ)へのインタビューとアンケートからの質的分析(「I」内は支援者からの具体的感想)

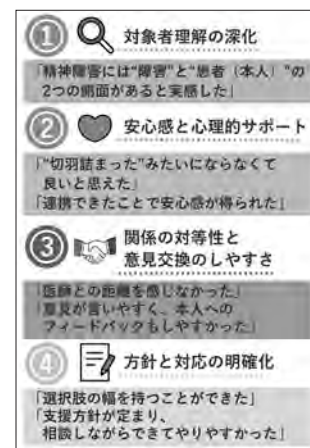


図2 対象者3名からの評価(アンケート方式)

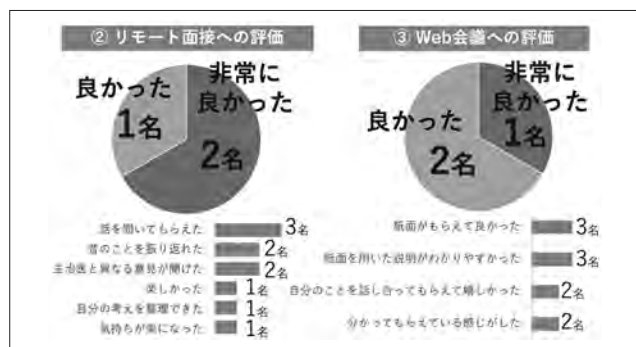


図3 支援者(やすらぎ)からの本活動に対する評価

